

新潟県十日町市の山合の村に廃校をマルゴト作品にした「絵本と木の実の美術館」がある。木造二階建ての校舎を、ぼくの絵をかざる「美術館」にするというプランは、この村のたたずまい、小さな学校の教室や廊下や壁に出会った時、ここは美術館ではなく「空間絵本」にしようと考えた。流木や木の実を用いて、最後の在学生やオバケを主人公にし、学校をまるごとアート作品にした。

「絵本と木の実」という可愛い名前、親子連れがやって来た。だが初日から子どもが「コワイ！入りたくない！」と入り口で何人も泣いていた。だが平日でも1000人もの観客がおしよせてくるとは思ったこともなかった。夕方、また子どもが泣いていた。「帰りたくない！」といって。

こんなことを「奇跡」と云っているのではない。10年前に計画した校庭に小川の流れを造るという計画は「ユンボ」というニックネームの男がやってきて実現！ぼくの描いた制作不可能なエスキースはマルイチという「空間施工管理技師」(Aerial National Engineer)の高度の技術を持つ人々が無償で進めてくれている。1トン近い大木の切り株が15mの空中に浮んでいる。

そういうとんでもない事が次々と起こる「美術館」。一番すごい協力者はこの「鉢」という集落の人々である。

そこで、今回米人詩人アーサー・ビナードとの合作「カラダのなか、キモチのおく」を開催している。

おそらく、危険、嫌がられながら生きているマムシの立場になって、巨大作品と絵本を共同制作した。ヒトはマムシを見つけると殺し、自分のまわりから排除してきた。例えとして適当ではないが、難民や在日の人々を差別する思想に似ているように思える。相手の立場に立つという事は、まず相手のことを知る事、マムシのことを知れば知るほど、ぼくは、マムシを尊敬してしまった。

「春の小川」という歌は、高野辰之が渋谷区の街中を当時流れていた川を見て創ったらしい。高野には「ふるさと」「夏は来ぬ」「もみじ」などの作詞がある。高野の歌にあるような「小川」は日本中どこにもない。

だが、今年、美術館にはサラサラと流れている。ぼくの出身地土佐の野中兼山が考案した木工沈床という河川工法で創った小川だ。この川にはすでにマメゲンゴロウ、ミズカマキリ、何種類ものヤゴなどの水生生物と共に、イモリやサンショウウオなどが棲みついている。いろんな鳥、ケモノも様子を見にやってくる。そしてついに生態系の頂点にいる猛禽類がやってきた。その姿は立派ではほれてしまった。ぼくらは彼を毎日たのもしく見ていたがある日、ぱったり来なくなってしまった。二日後、ぼくはその亡骸を巨大マムシトンネルの裏手で見つけた。首を切断され、身体の半分はなかった。多分、イタチかテンの食料になってしまったにちがいない。これも自然の摂理、仕方ない。

このタカの名前は知らないが（サシバか？）レクイエムのため、みどりの流木で大きなタカを創った。1トン以上の重さになったが、空間施工管理技師のみなさんが空に飛ばせてくれたのである。



カラダのなか、キモチのおく